

近世イギリスにおけるブリテン意識の諸相

小林 麻衣子

1. はじめに

本研究の目的は、近世イギリスを構成する国や地域に内在するブリテン意識について検討することであった。近世の時代に独立していた王国や地域であるイングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドが徐々にイングランドに統合され、後にグレート・ブリテン国（イギリス）が誕生した。その過程において、人々はブリテン意識を形成していったのである。

これまで近世イギリスのブリテン意識の形成に関する研究では、対カトリック勢力に対抗するためにイングランドとスコットランドが統合してプロテスタント帝国となることを掲げてブリテン意識が形成された点、イングランドとスコットランドの協働植民地事業の場であるアイルランドにおいて醸成された点、1603年の同君連合など新たな政治体制を契機にブリテン意識が形成された点が指摘されてきた。既存の研究はこのように宗教・社会・政治的紐帯に着目し、出身ネーションのアイデンティティが新たなブリテン意識に取って替わったかのように論じてきた。しかしながら、一部の知識層の間では、出身ネーション意識とブリテン意識をあわせもち、例えば *Cambro-Britannus*（ウェールズのブリテン人）といったように複合アイデンティティを形成したのである。そこで本研究は、16・17世紀に出版された作品を対象として、複合アイデンティティの視点からブリテン意識の特徴を考察した。

2. 研究方法と資料

15～17世紀にイギリスで刊行された印刷物約13万点を収録している電子データベース *Early English Books Online* を主な資料として、出身ネーションとブリテンという複合アイデンティティを示す語 *Anglo-Britannus*（イン格蘭

ドのブリテン人)、*Cambro-Britannus* (ウェールズのブリテン人)、*Scoto-Britannus* (スコットランドのブリテン人)、*Hiberno-Britannus* (アイルランドのブリテン人) をキーワードとして検索し、調査を行った。そして複合アイデンティティが表れる作品について自称・他称のどちらで用いられていたか、作品の著者、テーマ、出版年等の書誌情報を中心に分析し、その特徴を考察した。

3. 結論

複合アイデンティティの作品が最も多かったのは、*Cambro-Britannus* で 66 点あった。そのうち自称した著者は 9 名で全 23 作品が確認され、人数的には少なかった。というのは、一人の著者 John Owen が全体の約 6 割の 13 作品も書いていたからである。自称した著者の作品ほとんどすべてラテン語で書かれており、テーマとしては詩が多くを占めていた。英語で書かれた自称作品は 2 点あったが、先の Owen のラテン語作品の英訳であった。自称作品の多くは 17 世紀前半に多く出版され、17 世紀後半に出版された作品の中にも Owen の作品の重版が多く含まれている。

他方、この複合アイデンティティが他称で用いられていた作品は 43 点あり、著者はイングランド人が多く、全体の 2/3 を占めていた。作品は 17 世後半が若干多く出版されていた。17 世紀全体を通して、テーマは歴史書 (12 点)、詩 (7 点)、辞書 (6 点)、宗教 (5 点)、地誌 (4 点)、植物 (2 点) 等があり、17 世紀後半には経済、占星術、旅行記、カタログ、演劇といったテーマの多様性が見られた。この複合アイデンティティを示す表記は、ピューリタン革命期の 1640 年代は特に週刊ニュースのタイトルに使用されていた。他称の *Cambro-Britannus* が特定の個人を示す場合もあったが、多くは人々全体を指していた。

Cambro 作品の次に、*Scoto-Britannus* の表記が見られる作品が多く、59 点あった。そのうち自称した著者は 23 名 33 作品あり、*Cambro* 作品と比較するとより多くの著者がこの複合アイデンティティを示していた。これらの作品の多くはラテン語で書かれているが、中には英語の作品 (7 点) も含まれていた。

この点も *Cambro* 作品とは異なる。複合アイデンティティを自称した作品の半数以上は 17 世紀前半、特にステュアート朝ジェームズ 6 世・1 世治世期 (1567-1625 年) に出版され、著者の多くは直接・間接的に宮廷と関係があった。

一方、*Scoto-Britannus* の他称作品は 26 点あり、その著者の出身は、匿名もいるが、スコットランド、イングランドと半々であった。出版された時期は、自称作品と異なり、17 世紀前半が 7 点と少なく、17 世紀後半がその倍以上の 19 点と多かった。特に 1680 年代以降がそのうちの半数以上 (15 作品) を占めている。作品のテーマは詩、文法書、宗教、地誌、歴史、カタログ、政治、哲学、医学など多岐にわたっている。とりわけ 17 世後半のテーマとして宗教 (8 点)、地誌 (3 点)、カタログ (3 点) が多かった。

Anglo-Britannus の作品は、自称・他称含めて 31 作品と少なかった。自称した著者は 9 名 9 作品で歴史、演劇、医学、宗教、政治、考古学事典と多様であった。そのうち 6 作品が 17 世紀前半に出版された。

他称の作品は 22 点あり、テーマは宗教、歴史、政治、地誌、旅行記、新聞、説教、植物学、カタログと多様である。他称作品のうち *Anglo-Britannus* が人々全体を指していた作品は少なく、多くは特定のイングランド人、特に、法学者兼著述家のジョン・セルデンを指すことが多かった (10 作品)。この点は *Cambro* 作品、*Scoto* 作品と比較して *Anglo-Britannus* の特徴である。他称作品のほとんどは英語で書かれ、17 世紀後半に 16 作品が出版され、テーマは宗教史や経済史を含めた歴史 (7 点)、宗教 (3 点)、政治 (2 点)、地誌、説教、カタログ、植物学と多様であった。

これまでの傾向とは異なり、*Hiberno-Britannus* の複合アイデンティティは自称他称ともに皆無であった。一方、*Anglo-Hibernus* と自称した作品が 2 点 (著者 1 名) あり、その著者はアイルランド出身でイングランドにおいて聖職についた人物であった。作品の内容は神学に関する内容で 1649 年、1656 年に出版されていた。

これまで見てきたように、複合アイデンティティはイングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドというネーションごとに異なる特徴を帯び

ていた。複合アイデンティティの自称作品に共通していた点は、ステュアート朝ジェームズ6世・1世治世期に多く出版されたことである。著者たちは王ジェームズのブリテン統合ヴィジョンに沿う形で複合アイデンティティを自称していたといえる。他方、17世紀後半の共和政の時代には、複合アイデンティティの他称作品が多く出版され、しかもテーマは政治・宗教の党派的な意味合いが薄れ、より一層多様化していった。したがって、17世紀をとおして王家の統合政策という呪縛から解放され、文化的側面が強いブリテン意識と出身ネイション意識を共存させた複合アイデンティティが用いられるようになったといえる。

参考文献

小林麻衣子「スコットランドにおけるブリテン意識とプロテスタント帝国：1540年—1651年」『防衛大学校紀要（人文科学分冊）』第117輯、2018年、1-17頁。

小林麻衣子「17世紀スコットランドにおける「北ブリテン」意識」『CALEDONIA』46号、2018年、1-8頁。

小林麻衣子「資料：16・17世紀スコットランドにおける複合アイデンティティに関する一考察—*Scoto-Britannus* 作品一覧—」『防衛大学校紀要（人文科学分冊）』第124輯、2022年、23-38頁。